

深見けん二句集『もみの木』を読みて

橋本久美

けん二先生は、ご自身の白寿の日（令和三年三月五日）に第十句集『もみの木』の発行を決め、平成三十年から令和三年までの作品四百五十一句をまとめておられたが、九月十五日に逝去され、十月十日の発行となった。

一と部屋の暮し始まり雲の峰

二人して使ふ小机露けしや

介護受けつつたつぷりと初湯かな

時雨るるやケアのランチはオムライス

露の身を励まし合って老夫婦

平成三十年六月、グループハウス「もみの木」に先生夫妻は転居され、雲の峰のように力強くまた励まし合って一部屋の新しい生活を始められた。どの句にも深い気持が窺えて心を打つ。

菰の中一輪の熾寒牡丹

吐く息も染まるばかりのみどりかな

邯鄲やほどよく月の上り来て

青空のざわめいてゐる枯葉かな

眼前の植物、動物の季題を心にしみこませる。そして言葉を授かる。どの句も平明で調べがよく、読後、爽快な詩情の中に浸る。「主観を豊かにして、客観写生で主観を滲ませたい」という先生の言葉が思い起こされる。

悼 斎藤夏風さん

何につけ頼みの君も萩の露

流れけり青邨の星夏風の星

けん二先生は同じ青邨門下である夏風先生を月二回開催の木曜会で約九百回も共にしてきた盟友と言っておられた。その帰宅時の車中でお二人が青邨師のことを親しく話しているのが聞こえてくるようである。

この花に通ひて齢を重ねたる

車椅子に乗せていただき桜狩

所沢市下安松の旧居から近い寺、東光院で毎年詠まれた桜である。「齢を重ねたる」に万感の思いがこもる。桜の花を季題とした句数は先生の数多い作品の上位にあると思う。桜をじっと見上げる眼差しが柔らかい。

卒寿なるガールフレンド初電話

初電話の先生の弾んだ声が若々しい。

啓蟄やその日白寿の誕生日

夢の中滑空自在春の宵

先生はいつもはるかや虚子忌来る

令和三年の作品から選んだ三句である。啓蟄はけん二先生の誕生日。白寿のお祝い会の際の元気なお顔がふと偲ばれる。全句集を通じて数多く虚子先生を詠み、虚子忌を詠まれた。そして生涯をかけ虚子先生を慕い、学ばれた。

句集『もみの木』を読んだいま、虚子のいう「俳句は品格を尚とぶ」、「芸術の極意は、やわらか味」の言葉が浮かぶ。けん二先生の句には、それらに加え「優しさ」を感じる。いま改めて「重ねて授かる」の習練の大切さを強く感じている。